

Zoomによる大会開催に関して事務局よりお知らせ

今年度は、感染症流行などの状況を鑑みましてオンライン上での年次大会開催となりました。異例のことでもありますので、プログラムに先立ちご案内申し上げます。ご一読のほどをよろしくお願いいたします。
*会員外の皆様のご参加もお待ちしております。その際は事務局まで御連絡ください。大会開催についての詳細を後日メールにてお届けいたします。

1. 年次大会 Zoom 開催について

年次大会は、オンライン会議システムの Zoom を使用しての開催となります。Zoom のミーティング情報詳細は、後日メールにてお知らせします。その際、会議が行われるサイトの URL 並びにミーティング ID 番号、パスコードをお送りします。Zoom ミーティングへの参加方法に関しては、以下のリンクをご参照ください。

Zoom ミーティングに参加する方法

<https://zoom-japan.net/manual/pc/join-zoom-meeting/>

2. 特別講演について

本年度の特別講演は、オンライン開催に伴う調整のため中止とさせていただきます。ご了承ください。

3. Zoom ミーティング事前講習会のお知らせ 11月14日(土) 14:00~

オンラインでの大会は初めての試みですので、大会前に Zoom のミーティング事前講習会を予定しております。11月14日(土) 14:00 より、シンポジウム当日と同じサイトにパスコードを使って入室し、カメラやマイクテストを実際に行っていただけます。ご希望の方はご参加ください。その際、ご質問があればぜひお寄せください。なお、この講習会のパスコードは後日メールにてお知らせいたします。

4. 懇親会のお知らせ (Zoom 開催)

懇親会を 17:30~19:30 の予定で同じ Zoom 会場にて行います。入退室の時間などに関しましては特に制限は設けませんので、ご都合に合わせてお気軽にご参加ください。好きな食べ物、飲み物をご用意の上、画面越しにご歓談いただけたらと願っております。

5. 出欠確認について

毎年、ハンドアウト部数や懇親会参加人数の把握のために出欠をお伺いして参りましたが、今回の大会はオンライン形式のため、お手を煩わせる必要はなくなりました。よってプログラム配信に伴う事前の出欠確認はいたしません。例年変わらず多くの方のご参加をお待ちしています。

6. (追記) 会費のお支払い

会費のお支払いは、振り込み用紙をご利用いただくか、下記の振込先までよろしくお願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行 00190-0-661999 日本シェリー研究センター

7. ご質問など

その他、Zoom 開催に関してご質問やご懸念などがあれば、事務局までお寄せください。

日本シェリー研究センター第 29 回大会

日時： 令和 2 年 (2020 年) 12 月 5 日 (土)

方式： Zoom にて開催 (Zoom の情報に関しましては、前ページに掲載してあります)

プログラム

1. 14:00 開会の辞 会長 阿部 美春
2. 14:15 日本シェリー研究センター シンポジウム

メアリー・シェリーの独自性を探る

司会 佐々木 真理

パネリスト I 吉田 量彦

「自由殺し liberticide」の告発者

——パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』をどう受け止めたか

パネリスト II 佐々木 真理

メアリーの哲学的考察の文学的企てとは

——スタール夫人『ドイツ論』における「新しい哲学」からのヒント——

パネリスト III 川津 雅江

「どうして最後の女性ではないのか」

——メアリ・シェリーとメアリ・ウルストンクラフト

レスポンス 佐々木 真理

3. 16:25 年次総会 昨年度分会計報告・役員改選・その他
4. 17:30 懇親会 大会と同じ Zoom 会場にて (~19:30)

シンポジウム

メアリー・シェリーの独自性を探る

司会 佐々木 眞理

メアリーは著名な著述家から生まれたサラブレッドである。両親が時代の思潮の一端になった問題作家のみならず、夫はシェリー、友人がバイロン、他にも名だたる著名人に囲まれ、自らもひとかどの作家として成長したいという野心を常に秘めていたことは確かであろう。貪欲に様々な分野の本を読み知識を蓄えた姿がその心を物語っている。シェリーと同様メアリーにとっても平等な社会、束縛のない自由な世をどう構築するのかが重要なテーマであった。そういう社会を作るには人間には何が必要なのか、どのような哲学が必要なのかと自分の視点を常に探していたにちがいない。このような観点から、パネリスト吉田量彦氏は、スピノザの汎神論論争がドイツ・ロマン派と英語圏のロマン派にどのような影響があったのか、シェリーが訳すまでに熱心に取り組んだ『神学政治論』はシェリー夫妻にどのような意味があったのかを探る。パネリストII佐々木は、母親と同じように反逆精神と勇敢さをもつスタール夫人の『ドイツ論』からの影響を見る。メアリーはこの本より人間への理解を深め、メアリーの小説に独自性をもたらす助けになってはいないかを論じる。最後のパネリスト川津雅江氏は『最後の人間』における母ウルストンクラフトとは一線を画したメアリー独自のジェンダーへの見方はあるのかを論じる。最後に司会が総括する。

(ささき・まり：武蔵野大学)

「自由殺し liberticide」の告発者

——パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』をどう受け止めたか

パネリストI 吉田 量彦

1810年代の後半、シェリーはスピノザの著作『神学・政治論』の英訳を試みていた。その少し前、隣国のドイツで新しいスピノザ著作集が刊行されていたから、英国でも入手しやすくなっていたのだろう。

この新著作集の刊行は、さらにそれに先立つ1780年代以降のドイツ語圏で、いわゆる汎神論論争を通じ、スピノザの哲学が再注目、再評価され始めたことの結果に他ならない。汎神論論争は当時のドイツ語圏の文学や思想、わけでもロマン派のそれに大きな影響を及ぼしており、そのドイツ・ロマン派と英語圏のロマン派の間にもどうやら濃密な摂取・影響関係があったようなので、シェリーが『神学・政治論』に目を付けたのも一見すると当然の成り行きのようなのだが、話はそう単純ではない。汎神論論争で『神学・政治論』が話題に上ることは、実はほとんどなかったからである。

本報告の前半では、まず汎神論論争の概略を紹介した後、当時のドイツ語圏の教養市民層を取り巻いていた政治的・社会的環境を、同時代の仏語圏および英語圏のそれと対比してみたい。私見では、『神学・政治論』を何らかの政治哲学的関心のもとに取り上げることを可能にするような条件が、前者ではまったく整っていなかったのに対し、後者ではまがりなりにも整っていたように思われる。さらに後半では、『神学・政治論』で展開されたスピノザの思想そのものに着目し、シェリーの関心を特に引き付けたと思われるいくつかの論点、とりわけ思想・言論・表現の自由をめぐる論点を浮かび上がらせてみたい。

(よしだ・かずひこ：東京国際大学)

メアリーの哲学的考察の文学的企てとは

——スタール夫人『ドイツ論』における「新しい哲学」からのヒントー

パネリストⅡ 佐々木 眞理

ネッケル宰相の娘であるジェルメール・ド・スタール、通称スタール夫人の二度のドイツ亡命の果実とでもいうべき『ドイツ論』は、1813年にロンドンで出版され、メアリーはこの本を1815年に読んでいる。1810年に出版された初版本はナポレオンによって発禁処分を受けた問題の書である。ドイツ民族の文化や芸術、哲学や宗教に対する広範な知識、それを語るに足る十分な洞察力、さらには豊かな感性から表現されるスタール夫人自身の倫理観と情緒に裏打ちされた『ドイツ論』は、ただのドイツ案内の書ではない。それは驚くべき啓蒙の書とも言えるものである。フランス・ロマン主義に大きな影響を与えもした。同じ女性、そして母と同じ「自由」を抑圧する権力に立ち向かうスタール夫人の『ドイツ論』はメアリーに深い共感をもたらしたであろう。この本は『フランケンシュタイン』の物語の背景や登場人物の創作に大きな影響を与えてもいるからである。すなわち、スタール夫人が紹介する「新しい哲学」からメアリーは何かヒントをつかんだのではないかというのが私の推論である。メアリーの小説、主に『フランケンシュタイン』において「平和のための道標」が編み込まれていることを論じ、メアリーの独自性として捉えたい。

(ささき・まり：武蔵野大学)

「どうして最後の女性ではないのか」

——メアリ・シェリーとメアリ・ウルストンクラフト

パネリストⅢ 川津 雅江

「どうして最後の女性ではないのか」—このように『リテラリー・ガゼット』は『最後の人間』(1826)の書評の中で最後に問いかけた。この問いは、「われわれ男性評論家」と名乗る書評者のジェンダー・バイアスを反映する。彼は常に女性蔑視を露わにしなが、最後の人間の物語を「未亡人」の個人的苦悩の物語に矮小化しようとした。彼が小説の中で展開される政治的、社会的、文化的見解を無視しているのは、女性作家にとって不適切な領域だからだ。いや、もしかして、メアリ・シェリーの考えをその母親の思想のように危険視していたのかもしれない。「フランケンシュタインの著者」の本名が「メアリ・ウルストンクラフト・シェリー」であることは、1823年に公表されていたのだから。

とはいえ、「どうして最後の女性ではないのか」は、『最後の人間』におけるジェンダー表象を考えるのに、なんとも興味をそそられる問いである。メアリ・シェリーは、「肉欲に耽った好色な人物」(チャルマーズ『伝記辞典』)としてのメアリ・ウルストンクラフト像が確定されていた時代に、『最後の人間』で、母親の『北歐からの手紙』(1796)の一節を引用しただけではなく、注では出典を明示した。本発表では、メアリ・シェリーの公の場におけるこの大胆な行為に注目し、母親の思想に対する娘の反応の視点から『最後の人間』を読むことによって、この小説におけるジェンダー表象の意義や問題などを精査する。それによって、メアリ・シェリーの独自性の一端を明らかにしたい。

(かわつ・まさえ：名古屋経済大学名誉教授)